

---

# いつもと違う君

G.U1492

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】  
いつもと違う君

【Nコード】  
N2370P

【作者名】  
G・U1492

【あらすじ】  
風邪を引いたルキア、その看病中に一護は・

## （前書き）

イチルキ小説です。

カプ要素あり、苦手な方は注意！

今回は甘めです。

よろしければどうぞ

また、感想、意見などがありましたらドシドシ送ってください。  
UP主が喜びます。

今日の昼間は、俺とルキアの二人きり

だからこそ、俺はあんな恥ずかしい事をしてしまったのかもしれない。

なぜ二人きりなのかというと、

遊子と夏梨は遊びに行つて、親父はなにやら用事があるかららしい。

おかげで朝から親父に起こされるなく、虚退治や学校で疲れてる体をゆつくり休ませる事が出来た。

「ふああ、よく寝た。こんなにゆつくり寝れたのは久しぶりな気がするぜ。」

「あれ？ ルキアは起きてねえのか？」

「いつもは俺よりも早く起きてるのに変だな。」

あれか、ルキアも疲れてんのかな。

そう思つて俺はルキアを起こさずに勉強を始めた。

「ゴホッゴホッ」

押入れの方から、咳が聞こえてきた。

（まさかっ）

俺は慌てて、押入れの扉を開けた。  
すると苦しそうな顔でルキアが眠っていた。

（なぜ俺はもつと早くに気がつかなかったんだ！）  
（とりあえずベッドに移動させねえと）  
（ルキアを起こすかもしれないが仕方がないな）

俺はルキアを押入れの中からベッドに移動させようと  
ルキアを抱き抱えた。

「ゴホッ・・・一、護？」

「ああ悪い起こしちまったか」

「よい。所で一護、これはどういう状況だ？」

「お前が風邪で苦しそうだったから俺のベッドで寝てもらおうと思  
つてな。」

「そうか、すまないな」

「大丈夫か？」

「大丈夫とは言い難いな。」

俺はルキアの額に触れようとした

「一護、」

「ん？ どうした。」

「早く降ろしてくれぬか？ この体制は少し恥ずかしい・・・」

ルキアに言われて自分達の体制を確認すると、いわゆるお姫様抱っ  
この体制になっていた。

「わ、悪い」

俺はルキアをベッドに寝かせた。

ルキアの額に触れてみると、そこまで体温は高くなさそうだった。  
「ちよっと待ってる、風邪薬となんか体に良さそうな物作ってくる。」

そう言っただけ俺は部屋から出ていこうとした時、  
ルキアは淋しそうな顔をして俺の服を掴んだ

「待ってくれ、一護。一人にしないでくれ。」  
「ルキア？」

こんな弱々しいルキアは珍しい。俺は、できるだけ優しい声でルキアに問い掛けた。

「どうした、ルキア？」  
「ううわからぬ。今は何故か一人だと心細いのだ。」  
「そうか…大丈夫だルキア。すぐに戻ってくるからな。」  
「なるべく早く戻ってきてくれ」  
「じゃ行ってくる。」

俺は部屋を出る時、ちらっとルキアの顔を見た。  
相変わらず淋しそうな顔をしていた。

（いつもと様子が違うな。）

俺はドアを閉めて、部屋を後にした。

俺は、一階でルキアのためにお粥を作っていた。  
作りながら俺は、ルキアの事を考えていた。

「ルキアが風邪を引くとあんな感じになるんだな」

よく考えてみれば、風邪を引いたルキアを見るのは初めてだ。

「可愛いじゃねえか、ちくしょう」

いつもの少し生意気な感じはどこへやら、ずいぶんと甘えん坊になっていた。

いつものルキアもいいが、あのルキアの破壊力は抜群だ。

俺は、ルキアは風邪で苦しんでいるのに自分は喜んでいる現状に少し罪悪感を覚えた。

お粥が出来たので、俺は部屋へと急いだ。

「おいルキア、大丈夫か？」

俺が部屋の扉を開けると、ルキアはこっちを振り向いて微笑んだ。

「少しはましになったぞ。」

「そうか… これ食えるか？」

「うむ！ もらうぞ」

「熱いから気をつけて食えよ。」

ルキアは、ふーふーと息をかけながらお粥を食べた。

「あ、熱っ 貴様！ 私を火傷させる気か！」

「だから言っただじゃねえかよ、気をつけて食えって。味はどうだ？」

「うまいぞ一護」あとは熱くさえなければ完璧だったぞ。」

「だから、お粥はそういう食べ物なんだよ……」

「ならば熱くないお粥を開発すればよいのではないか？」

「無茶いうな！」

俺達は心地よい言い合いを続けた。

看病のおかげか、ルキアの体調は夕方頃には大分回復した。

「良かったなルキア。この調子でいけば、明日には治りそうだぞ」

俺がそう言つとルキアは申し訳なさそうな顔でこつちを見てきた。

「今日は本当にすまないな一護。私のせいで一護の貴重な休みが無くなってしまった。」

「いいつて気にするな」

「でも・・・」

ルキアは泣きそうな顔をしていた。

確かに朝の俺はこんな弱々しいルキアは可愛いと思っていた。

でも、俺は笑っているルキアが一番好きなんだ。

「俺はそんなことは思ってねえよ。俺はお前の力になることができ  
て満足してる。」

それに、今日は1日中お前のそばにいられて嬉しかったよ、

お前の貴重な甘えるような仕草も見れたしな、

だからそんな自分を責めるような考えはするんじゃないわねえ。」

「お前は笑ってる顔のほうが可愛いからよ、ずっと笑っててくれ。」

俺はそう言って、よしよしとルキアの頭を撫でた。

「なかなか恥ずかしいことをいうな貴様は、だがありがとう一護」

ルキアはそう言って、涙目のまま満面の笑みで俺に笑いかけた。

その顔を見た瞬間、俺は思わずルキアにキスしていた。

「い、一護！ 貴様何をしておるのだ！」

「何って・・・」

俺はルキアに言われて自分のしでかしたことに気がついた。

「わ、悪いルキア、今のは忘れてくれ！」

「忘れることなどできるか！ 今ので風邪が移っても看病などせんからな」

「ぐ・・・」

後日、見事に俺は風邪を引いた。

だが、ルキアからの看病は受けることができたので、幸せだった。

（後書き）

初めての甘めの小説を書きました。

書いててかなり恥ずかしかったです。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2370p/>

---

いつもと違う君

2010年12月1日10時55分発行